

何が響くかわからない、誰が見てるかわからない

第10期OB 石井 隆太

同期生に遅れること1年、昨年3月に大学を卒業し、4月から大学院に進学しました。進学後は、学位論文の執筆に向けて研究を進めつつ、平日は演習形式の授業の準備に追われ、休日は学会参加・発表、時には企業インタビューに出かけたり、自主勉強会を開いたり、何だかんだで毎日充実した日々を送っています。ただ、どれもこれも初めての経験でしたので、何から始めればよいのか、どんな具合で取り組めばよいのか分からないことが沢山ありました。自分がなかなか前に進めない中、大学院の先輩方が先へ先へと自身の研究を進めていく姿を見て焦りを感じて、でも、焦れば焦るほど自分のペースがつかめず、腰を据えて研究しなきゃと言いつつ聞かせて…、そんな悪戦苦闘の1年だったように思います。けれど、そんな生活を望んで進学を決めた私にとっては、この上なく楽しい1年でした。

そんな大学院生活での新たな経験の1つに、定期的な学会参加が挙げられます。昨年は、日本商業学会という学会に、修士会員として入会し、ほぼ毎月開かれる部会に足を運びました。最先端の研究内容を聞いて知識を吸収する、学会中に情報交換を行うなど、学会の楽しみ方には色々ありますが、学会後の懇親会にて先生方と交流するというのも、楽しみ方の1つです。特に、私のような新米にとっては、自分が読んだことのある本や論文の著者に出会えるという機会でもありますので、これが大きな楽しみです。そんな懇親会にて、とある先生が、「僕が大学院生の頃は、時間がなくて、が禁句だった」とおっしゃっていました。仕事をしているわけでもない大学院生が、研究の遅れや資料の不備を、時間のせいにするのはダメだということです。そりゃそうだ、ぐらいの話にも思えますが、どうしてだか、妙に心に残りました。

時に、他人の話が妙に心に残ることがあります。それは、話し手の強調ポイントだったり、そうじゃなかったりします。心に残るのは、少なくともある程度は、聞き手が関心のある内容だったのだということだと思います。ですから、今思えば、その話を聞いた当時の自分は、自分の不出来を時間のせいにしていたのかもしれない…。一方、その先生からすれば、当時の私が何に関心をもっていて、何が心に残ったかなんてことは、知る由もありませんし、ましてや、こうしてOB会誌の中で取り上げられているなんて、想像さえしていないことでしょう。

何が言いたいのかと申しますと、自分の行動を、いつ誰がどこで見ているのか、何が響いているのかどうかは、予想し切れないということです。仕事でも、ゼミでも、研究でも、そこでの行動が、どこで誰にどう評価されているのかはわかりません。多くの方はそうではないけれど、もしかしたら、自分の行動をどこかで誰かが見ている、彼らに何か良い刺激を与えているのかもしれない。そうした人がいるかもしれないという可能性を信じて、来年も、時間を有効に使って、真面目にコツコツ頑張りたいと思います。